

---

# にゃんとも寒い日の出来事

ランデブー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

にゃんとも寒い日の出来事

### 【Nコード】

N5392D

### 【作者名】

ランデブー

### 【あらすじ】

ニャン次郎とニャン太と人間の、にゃんとも寒い日の出来事。

空にあんにやに真つ赤にや太陽が浮かんでいるのに、何故全然暖かくにやいんだろう？ 何故こんなにやに寒いんだろう？ 今日にはやんとも寒いにや、ブルブルです。

オイラは寒いのが苦手、だからにやるべくこの土管から出にやいようにしている。でもお腹は空くにや、お腹がぐーぐー鳴ってウルサイにや、誰か親切にや猫がお昼ご飯を持ってきてくれにやいかにやー。

にや、友達のニヤン太がお魚さんを持ってきてくれたにや。

「ニヤン次郎、お昼ご飯だ。カレイだ」

「ありがとにや、ニヤン太は優しいにや」

寒空の下、土管のにやかでオイラはお魚さんに囓り付いた。ニヤン太はお魚さんに囓り付かずぼーっとしている、どうしたんだろう元気にやいにや。

「ニヤン太、悩み事でもあるにや？」

「えっ、何でわかった？」

「だってお魚さん食べてにやいしぼーっとしてるにや、そりゃわかるにや」

「そうか、俺ぼーっとしてたか……」

ニヤン太元気にやいにや、オイラはお友達だし相談に乗るにや。その前にこの美味しいカレイさんを食べるにや、残すと勿体にやいし骨まで食べるにや！

「そのカレイあげるよ、俺はいらないから」

そう言ってニヤン太は土管から出て、寒い外へと行ってしまった。オイラはあと半分残っているカレイと一匹のカレイをヨダレを垂らしにやがら見た、しかし顔を左右に振ったあと風がビュンビュン吹いている外へと出た。ニヤン太は友達だもん、放っておけにやいよ。

「待つて！ ニヤン太待つて！ オイラに話してよ、にやにがあつたのか」

「ニヤン次郎……」

チリンと首に付いている鈴を鳴らし、ニヤン太がオイラの方に歩いてくる。にやにや、話してくれるんだ！ そうにやんだ！

ニヤン太はオイラの目の前に来て、目を細めてじーつと見てきた。にや、にやにか顔に付いてるにや？ 朝はちゃんと水で顔を洗ったにや、冷たかったけど我慢したにや。

「ニヤン次郎、お前」

「友達だから放っておけにやいにや！ 友のピンチは友が助けしにやいと！」

「……ああ、ありがとう。そのまま動かないでね」

にやんか予想外にや！ オイラが想像していたのは、ニヤン太がとびつきりの笑顔ににやる事にや。心配してくれてありがとう、お前は良い友だ。ってなるかにやと思つたのに、実際はリアクション低いにや。しかも動かないでって、超氣ににやるにや。

「迷惑にや？ 友のお助けはいらにやいにや？」

「いるよ、全然迷惑じゃないよ」

「だったらにやんでリアクション低いにや？」

「頭に乗ってるよ、僕達の大好物が」

空き缶がコロコロ転がってオイラに当たった。にゃ？ 大好物が乗ってる？

頭を振ってみた、そしたらネズミが地面に落ちた。何故今まで気付かになかったんだろう？ オイラ、猫の好物であるネズミに！寒くて気付かなかったのか、ニヤン太を心配していて気付かなかったのか、この二つだとしたら後者が良いにゃ。

チューチュー鳴いてちっさくてすばしっこくて美味しいネズミ、ひよっとしてこのネズミも寒いのが手で土管にいたのかな。

そうか、ニヤン太はこのネズミを狙っていたのか！ だから動かないでって言ったのかー。

「魚も美味しいけどネズミも美味しいよにゃ」

「そうだね、でも俺はいらないよ」

その時ネズミは逃げるため走りました、しかしオイラの猫パンチをくらい気絶しました。ニヤン太は手が震えていました、寒いのかにゃ。

「それを持って土管に戻ろうか、お腹すいたし」

「にゃん！」

素直じゃにゃいにゃ、お腹が空いてたにゃら言ってくれば良いのに。

オイラとニヤン太は、風を多少は凌げる土管に入った。残したカレイはそのままだった。

「食べようか、食べ終わったら話を聞いてくれ」

「わかったにゃ！」

オイラ達はお昼ご飯を食べた、黙々と食べた。

カレイさんありがとう、貴方のおかげでオイラは生きています。  
生きとし生けるもの、今日も精一杯生きましょう。

「お腹いっぱいになつたし、にやにがあつたのか教えてほしいにや」

「うん、教えるよ」

その時ぽたぽた、という音が聞こえてきた。雨が降ってきたんだ、雨は冷たいから嫌だにやー。

「ケント君とアヤノちゃんがケンカしててさ、胸が痛くてあの家にはもう帰りたくないんだ」

「……」

「それに俺は飼い猫じゃん、お前と違って良い思いしてるしそれが情けなくて。野良のお前は格好良い、たくましい、一人で何でもできる」

「ニヤン太、何言ってるにや」

「俺は人間に飼われてるから雨風の心配をしなくても、食事の心配をしなくても良い。でもお前は毎日精一杯に生きている、俺は精一杯に生きていない。飼い猫なんて負け猫だ」

ケンカで居場所がやくにやつて色々考えてしまったんだ、そして自由気ままに生きている野良猫に嫉妬しつとしてるんだ。まずは落ち着かせにやいと、深呼吸でもさせにやいと。

「落ち着こうよ」

「落ち着いてるよ、俺は平常心だ！」

「今頃ニヤン太をさがしてるところから家に帰ろう」

「さがしてなんかない、俺はいらないんだ！俺のせいでケンカに

なっ たんだ！」

ニャン太は走っていった、雨が降りしきる中を。オイラは走っていった方を見て涙を流した。

「ニャン太の馬鹿、馬鹿馬鹿馬鹿！」

オイラは涙を流しにやがら走った、雨は嫌だけど今はそんなにやの関係にやい。友をお助けるんだ、大好きにやニャン太をお助けるんだ。

「ニャン太！ ニャン太何処！ 返事してよ！」

叫んだ、人間が何かしらとオイラを見ても、人込みの中でも、雨に打たれにやがら、お助けするために叫んだ。

走った、叫ぶのと同じくらい。もう足が棒のようにやっっていて、これ以上は走れにやい。ゴメンねニャン太お助けできにやいや、こんなオイラは友達失格だよな。

「ニャン次郎？ 君ニャン次郎だよな？」

その時声が聞こえた。そこにいたのは、傘をさしていて涙目ににやっているアヤノちゃんだ。

「ごめんね、私達がケンカしたから君にまで迷惑をかけて」

ひょいと持ち上げられ傘の中で抱き締められた。にや、にやかれ  
ても困るにや！ 抱き締められたら照れるにや！

「ニャン太がケンカなんかやめてって言うてくれたの、ケンカなん

かしても意味ないって言ってくれたの」

「そして、俺には大好きなお友達がいる、ニヤン次郎という最高のダチがいるって教えてくれたんだ」

ケント君だ、アヤノちゃんと同じように涙目だ。にやかにやいで！ オイラにやみだには弱いんだ、もらい泣きってヤツしちゃうんだ。

「心で伝えたんだ、ケントとアヤノに」

ニヤン太はケント君に抱き締められながら言った、その表情は笑顔だ。

仲直りしたんだ、良かったねニヤン太。オイラの事を最高のダチって言ってくれたんだ、ありがとう。

「いつでもお家に遊びに来て良いからね」

アヤノちゃんが笑顔で言った。

「一緒に遊ぼうぜ」

ケント君が言った。

「さっきはネズミを捕獲できなかったから、今度ネズミの捕獲の仕方を一から教えてくれよな」

ニヤン太が言った。

「みんなやありがとう、オイラは幸せにや」



ニヤン次郎が言った。

今日はにやんと寒い日だったけど、とってもあつかい事があったから風邪の心配はしにやなくても良いにや。

(後書き)

〇〇にや、と猫語(?)で読みにくかったらすみませんでしたm  
——) m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5392d/>

---

にゃんとも寒い日の出来事

2010年12月30日20時28分発行